

120720

## イスタンブル火災史研究関連

### AESOP (the Association of European Schools of Planning) 参加記録

田中 傑

#### 0. 概要

第 26 回 AESOP 年次大会において、『Effect of introduction of fire prevention facilities on fires in Ottoman Istanbul』と題した学術発表をおこなった。帰途、1895 年の大火後に「世界ではじめて既成市街地を全面区画整理した」とされるプロッテローデ町を訪問し、同大火の被災エリアと復興遺産の踏査をおこなった。

#### 1. 日程

2012 年 7 月 9 日～14 日 (アンカラ)

2012 年 7 月 15 日～17 日 (プロッテローデ)

#### 2. AESOP 会場風景



図 1 中東工科大学の会場

図 2 留学中の中国人が多数参加

図 3 プレゼンの様子

「都市計画史」分野の「人的災害とその軽減」というセッションへ割り当てられた。

会場からは「なぜイスタンブルなのか？ (オーストリア)」、「ポンプの導入や防火水槽の設置では、出火そのものを抑制できないのではないか？ (オーストリア)」、「建築の耐火性能のほか、人間活動における火気の使用について検討する必要があるのではないか？ (ラトヴィア)」などについて質疑がなされた。

その他、田中個人の科研費研究課題を遂行するためのカウンターパートをつくることに成功した。

#### 3. アンカラ市についてのメモ

- ・道路境界線から後退して建物が建っており、その後退部分を利用したオープンカフェが多数ある。



図4 オープンカフェ



図5 ミスト噴霧状況



図6 噴霧装置拡大

- ・カフェにはミストの噴霧装置が一般的に設置されている。気温こそ高いものの、湿度が低いため、木陰に入るだけでも暑気を避けるに充分であり、ミストの効果が強くできるように感じた。

#### 4 ブロッテローデ町 Brotterode について

チューリンゲン州 Thuringen の山間の町（図7、8）、かつては牧畜が盛んであった（図9）が、1920年代からはウィンタースポーツの町となり、ワールドカップなども開かれるようになった。人口2,750人。

1895年7月10日午後、子供が鱈をフライにしようとして出火、南西の風（註、谷下から吹き上がってくる風、踏査中もなんども感じた（図7））に煽られて大火となった。それ以前にも数度の大火にあっていたが、この時は4時間で842棟（付属屋含む）のうち729棟が焼失した。

当時の文献によれば、この火災が大火に至った理由は次の通りである。

「家屋の過半数が石造の大きなケラー（註、地下室）の上に木骨煉瓦造で建てられおり、外壁はこの地方の気候を考えれば合理的とはいえ、下見板で出来ていて、屋根はワラの上に中空煉瓦を敷いたものだった（図10-12）。また、家屋は密集していて、防火壁も備わってなかった。これら悪条件に加え、乾燥した天気が続いていたこと、この年は干し草がたくさん採れて、納屋に納まりきれない分が野積みされていたことが災いした。」（Ministerium der oeffentlichen



図7 右手からの風が火災を拡大



図8 谷筋の町を見下ろす



図9 牧畜業が火災の遠因のひとつ





図 10 焼け残った小学校（現役） 図 11 焼け残った住居 図 12 同、下見板にスレート貼り壁面



図 13 再建家屋（防火壁） 図 14 再建家屋（木骨煉瓦） 図 15 復興時に整備された広場



図 16 復興時に整備された広場 図 17 大火以前からある池 図 18 「消防ため池」と注意書き

Arbeiten (1895), Die Feuerbrunst in Brotterode und der Verlust der Grundbuecher des Amtsgerichts, Centralblatt der Bauverwaltung, 3. August, 1895, XV Jahrgang, Nr.31.)

再建家屋を観察したところ、少なくとも側壁についてはかつての「下見板+スレート貼り」（図 12）ではなく「防火壁」が設けられていた（梁の端部は露頭しない（図 13））。また、復興計画では街路の拡幅、増設、広場の設置（図 16、17）に加え、大火以前から構築されていた配水ネットワークの踏襲とデザイン上の活用を図っていた（図 18）。

プロッテローデ大火後の復興計画については、関東大震災当時、東京市政調査会が既成市街地における全面的な基盤整備の最初期の事例として言及していたものの、その後の日本はもちろん現地においても都市計画史上の位置付けがなされていない。将来的に探って行きたいテーマである。

以上